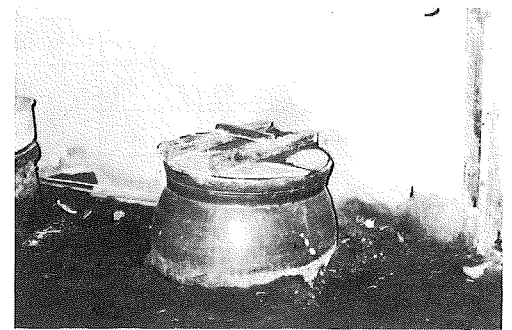


洗い物をして黄色くなるので風呂の水として利用され飲料水は、もっぱら堀や江湖の水を利用していた。

月二回のカラマ（旧八く十二日、二十く二十五日頃）に汲んでノンミズガメ（飲水瓶 六斗入り）二個ぐらいに貯蔵していた。寒の水は貯蔵力が高く重宝がられた。とくに正月餅の保存は寒の水につけて行われ田植えどきまで餅があつた。

昭和三十五年諸富町に上水道ができ、きれいな飲料水が供給されるようになった。



ノンミズガメ（三重）

二人の一生

人がこの世に生をうけて死ぬまでの間にはさまざまな機会にいろいろな儀礼が行われる。すなわち、誕生・成人・結婚・厄年・年祝い、やがて訪れる死に至るまでの人生の諸段階を区切る重要な節目を通過儀礼（人生儀礼）と呼んでいる。

これらの儀礼は内容も多岐にわたっているが、家族・親族といった人間関係から小路・集落といった社会的な承認を必要とするので多くの人々の参加を得て行われる。

(一) 出産と育児

1 妊娠・安産祈願

子どもができない人にとっては、子どもを望む願いは切実であつた。また、子授けの願いがかなえば無事の出産を願つて安産を祈願する。

子授け・安産を祈願する神仏は子供と関係の深い観音や地藏が篤い信仰をあつめており、浮盃の観音堂は子宝観音とも呼ばれ、また西寺井（提西）の地藏は妊婦が胸当てを奉納して安産を祈願する。

身近かな氏神社への参拝も多く、小坑の白石神社に伝わる伝説に神功皇后が朝鮮に出兵の際、お産を延ばすため白石神社の石の神さまを背おつてその効果があつたといわれ、安産の神さまといわれている。

火事を見ると赤ぼやけ、葬式を見ると黒ぼやけの子が生まれるとか、便所を掃除するとよい子が生まれるなどという俗信がある。不安定な精神状態のときに心に動揺を与えるようなことはしないで落ちついていれば、よい子が生まれるといったものであろう。

2 帯 祝 い

妊娠五カ月目の戌いぶの日に出産の無事を願って腹帯をしめる祝いが行われる。戌は犬に通じることから、犬は多産で産が軽いことにちなんだのであろう。

嫁の里から紅白の腹帯と祝鯛が贈られ、コゼンボ（産婆）さんを招いて着帯の祝いが行われる。

3 頼 み 茶 講 （繁昌茶講）

出産が近づくと嫁の里では膳の準備をしてきて、近隣の主婦を招き「お産のときはよろしゅうお願いします」と洗い物などの世話を頼む茶講をする。

4 出 産

コゼンボさんの助けを借りて自宅で出産する。古くは座産であったといわれる。

生児にはイヤアーフキといって、フキの汁をサラシに含ませてすわせる。体毒を消すためといわれる。

後産（胞衣）はイヤアーといい屋敷の一隅に埋めて父親が土を踏みつける。これは父親のいうことを聞き、父親に頭があらぬようにという呪いである。出産の汚れ物は近所の主婦が空地に方除けをたて、穴を掘りムシロを敷いて洗っていた。

親戚や親しい知人から祝いの品が届けられ、里からは生児の布団やおシメが贈られる。

5 名 つけ 茶 講 ・ 手 洗 い 振 舞 ばんめえ

生後九日目（七日目というところもある）に名つけの披露として親戚や近所の人を招いたり、紅白の餅・豆ナマス・煮メなどを配ったりした。また、手洗い振舞といって出産の洗い物をしてくれた主婦を招いて慰労をした。

6 日 晴 れ

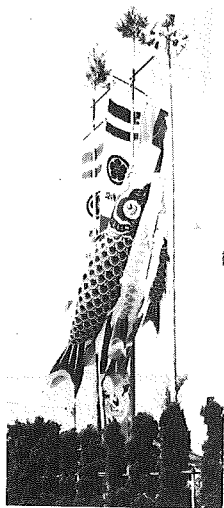
男児は生後三十日、女児は三十三日を日晴れといって、里から贈られた一つ身の晴衣（宮詣り着物）を着せて氏神社に無事成長を祈願する。知人の家では子どものひたいに紅をつけてやり、着物のつけ紐にお祝いを結びつけてくれた。

親戚や近所には命名札に餅・小豆煮メ・大根ナマスなどをつけて配る。

7 初 正 月 ・ 初 節 句

第二次世界大戦までは正月に年をとっていたので生児がはじめて迎える正月には男児は弓、女児は羽子板が贈られて盛大に祝われた。

また、女児は三月三日に雛人形（以前は少なかった）、男児は五月五日に吹流し、のぼり・鯉のぼりなどが里や



幟風景（諸富新村）

親戚から贈られた。

8 初 誕 生

満一年の初誕生はムカワリといつて生後一年を無事に迎えることができた祝いに餅踏みが行われる。

里から餅一重ねとブリ、親戚から男児はワラジ、女児はゾーリが贈られる。餅は中に小豆を入れたり、表面に小豆をまぐしたりしたもので、男児はワラジをはかせソロバンや扇子を杖に、女児はゾーリをはかせ尺（二尺ものさし）を杖にして餅を踏ませる。踏んだ餅は長方形に切り小豆のをせ、丸餅二、三個とブリ一切れあるいはナマスをつけて親戚や近隣に配ばる。踏み餅を食べると将来出世をしないなどといって、男の子には食べさせなかつた。

子の将来を占つてみようとな筆・そろばん・はさみ・ものさし・お金などを並べてとらせる。何をとるかによつて子の将来を占うわけでお金やそろばんをとれば商人に向いている、はさみやものさしをとれば裁縫が上手になると親は子の将来を期待した。

9 帯 解 き 祝 い

二誕生（数え三歳）を迎えると、今までのつけ紐をやめて、帯をつける祝いが行われる。里から四つ身の着物と帯が贈られ、帯解き祝いの茶講を近隣に配ばつた。

10 キャーフカキ・ヘコカキ

七歳（九歳）の祝いは大人になる前の大切な折目にあたり子どもの祝いの終わりでもある。

男児は七歳、女児は九歳の旧六月一日に絞りのヘコ、赤のキャーフが贈られヘコカキ茶講・キャーフカキ茶講が行われる（年齢は数え年である）。

(二) 婚 礼

1 通 婚 圏

通婚の範囲はいたって狭くほとんど村内婚であった。交通や水利など経済的なものから信仰、習慣といった日常生活に密接したものからも制約された。また、藩政時代は他藩との縁組は禁じられていたので、明治以後もしばらくはその影響が残っていた。例えば大堂津では近年まで道海島（久留米藩）との通婚は少なかったといわれる。

2 縁 談

通婚圏が狭い村落内の場合は、相手を改めて知る必要はないので、今日のような正式の見合いの形式はなかつた。

た。仲立人と本人(男)が娘には知らせず「馬見にきた」といって物陰から相手を見ることが多かった。また、恋愛で結婚することを、ツキエイミョウトといい、恋愛中は「チャンスス」といった。

3 口 固 め

結婚がきまれば、仲立人は吉日を選び「一生一代」にちなんで酒一升と鯛一尾を嫁となる家へ持って行く。一升固め・固め酒ともいう。この日に祝儀の日取りもきめてしまうことが多いが、改めて「日取樽」といって別の日にすることもあった。

4 雑 餉

婚約(口固め)が成立すれば、日をおいてやはり吉日を選んで雑餉が嫁方へ届けられる。酒・茶・帯・魚(鯛 一對)・傘(日傘・雨傘)・下駄・草履・野菜(ニンジン・レンコン・ゴボウ・ダイコンなど)・チクワ・カマボコなどを近親者が宰領人となって親戚や近所の若者が、近いところはメゴ(長方形の籠)に入れ、五荷・七荷と奇数にして担いで行った。

嫁方では親戚や近所の主婦を招いて雑餉開きといって振舞をした。

5 嫁 入 り

嫁入りが近づくと嫁の友だちを招いて、友達振舞という別れの宴をする。友だちは差合を贈る。

嫁入りの朝または夕方に聳入りと称して、聳が仲立人や親戚の人と連れだつて嫁の家を訪れる。これは古い結婚の形である聳入婚の名残りといわれている。

嫁の道具(タンス・ナガモチ・タライ・鏡台など)は嫁入りに先だつて宰領人の采配で運ばれる。

道具の出発・道中・到着では長持歌が唄われる。道中では見物人から何度も引き止められ歌が所望され、到着してから双方で歌のやりとりをして道具を納める。

へ道中雲助半天育ち 長い着物に縁がない飯塚 木屋の瀬 碁盤の面 駒を速めて中の茶屋
蝶よ花よと育てた娘 未は他人の手にかかる

タンス長持や七竿八竿 中の御衣装は綾錦

タンス長持や粗末なものよ 近所近辺頼みます

潮は満ちこむ舟走りこむ タンス長持担いこむ

こせどこせども此数こせど 又とこの敷こさしやせぬ

タンス長持貰うたからは 奥の納戸にしまいおく

祝いめでたの若松さまよ 枝も栄えて葉もしげる

こなた屋敷は祝の座敷 鶴と亀との舞い遊び

あなた百まで 私や九十九まで 共に白髪のはえるまで

タンス長持見かけにや重い 中は黄金やら 御衣装やら

午後から夜にかけて嫁入りの行列が出発する。夜中の十二時頃になることも多かった。

嫁入りの途中、中宿をとり休息し、支度を整えて再び婚家に向かう。行列が婚家に近づくると近所の子どもたちや若者が門口で藁火を焚いて迎える。聳の家より藁の銭がでていた。嫁はこの火をまたいで火の中、水の中でも辛抱するように、苦しいことがあってもそれを越えていくようにという意味があるといわれている。

聳方より出迎えが出て双方の提灯をとりかえる。

嫁が敷居をまたぐとき、カマブタカブセといって、釜の蓋を嫁の頭上にかぶせて「鶴は千年、亀は万年、いつてから出なし」と唱える。

本客は両親・祖父母・姉聳・伯父・伯母ぐらいが出席し三々九度の盃の後、祝宴となり宴は夜明けまで続く。大中島では、聳まぎらかしといって聳と同年輩の友だちが並んで座った。

6 み つ め

祝儀から三日目を、みつめといって嫁は島田髷から丸髷に結び直し聳や両親などと連れだつて、酒肴を携えて初めての里帰りをする。里ではミツマンジュウ（ミツメダゴ）で迎えてくれる。みつめは泊まるものではないといつて日帰りをした。

また、膝直しといつて聳の友達が祝いにくる。

みつめが済めば、お寺参りをし親戚や近所にお茶を配る。お茶は家を出ないようにと意味をもたせ、出の悪いお茶を使った。

(三) 葬 送

1 死 の 予 兆

烏鳴きを人の死の予兆（前知らせ）と考える俗信は広く知られている。

家のまわりで烏が鳴くと縁起が悪いといい、人が死ぬと烏が屋根の上で待っているともいう。烏だけでなく鶏の夜鳴きも忌み、特にめん鳥が鳴くと不幸があるという。また、トビが家のまわりを飛びまわると人が一人死ぬなどといい、異常な鳴声や飛び方などを凶兆とした。

ほかに、予兆ではないが死を連想するということで平常時には忌まれた動作がある。

○夜、爪を切ると親に縁がうすくなる。

○北枕に寝てはいけない。

○着物を左前に着てはいけない。

○竹箸・木箸でご飯を食べるものではない。



結婚式風景（昭和20年代後半）

また、箸と箸でとりあつてはいけない。

いずれも葬式における作法につながることから忌まれたものであった。

2 魂呼び

人間には靈魂というものがあつて、この靈魂が肉体から遊離することが死であった。古代における殯宮は遊離した靈魂が再び肉体に戻ってくることを乞い願つたものである。

習俗では、魂を呼び返す、魂呼びという作法を生みだした。生と死の境に臨んで枕もとで名を呼び蘇生を願うのは魂呼びの本能的なものであろう。

3 末期の水

臨終にあつては末期の水といつて、鳥の羽根や脱脂綿に水を含ませて唇を濡らす。死者は北枕に寝せ、枕元には一本花と一本箸を立てた枕飯を供える。また、死後硬直がはじまると、棺に納めにくくなるので晒木綿で体をしばり屈葬の姿勢にしていた。

猫が死者の上に乗ると、死者が躍り出すといつて近づけないようにした。

4 通夜

死亡当夜は、トキといつて親戚の人や知人、集落の人々は連れだつて悔やみに行く。香典は金銭や物品、親戚の主なる者は米を贈ることもある。ウドン・ソーメン・握り飯などを夜食として出す。

5 葬式加勢 (野辺加勢)

葬儀の世話は集落で協力しあう範囲がきまつている。地域生活における互助的性格を持つ組(小路・野辺内・隣保班)で、各戸より男女がでて、それぞれの役割に応じてあたる。

男性は通知・葬具づくり・米など・墓穴掘り、女性は炊事・色縫いなどである。

寺や親戚への通知はタヨリといつて必ず二人連れで行く。葬具は檜物屋が持つてくるが、旗・提灯・幟・六道(ろうそく立て)などは自分たちで作つた。古くは土葬であつたので死者を葬う墓穴掘りは穴掘り・池掘りといつて組の若者があたり酒を飲みながら掘つた。

女性の加勢人は、食い別れの精進料理をつくつたり接待をしたりする。また、色縫いといつて死者に着せる白着物(経帷子)は、モノサシやハサミをつかわずに、手尺ではかり引き裂いてつくつた。あわせて頭陀袋や手ぎん・脚絆・足袋などもつくつた。

6 湯灌

死者を棺に納める前に、湯水で体をふくことを湯灌といい、水を盥に入れておき、それに湯を注いで湯灌の湯とするが、ふだんは忌まれた作法である。

盥を二枚ほどはいで、盥を据えて親戚の者が体をふいた。白着物を着せ、頭陀袋には四十九枚の銭、遺族の爪や髪、死者の好物などを入れる。

7 火 葬

葬式を友引の日になると七人死ぬなどといって友引の日はさけた。古くは土葬であったが、衛生上の見地や土地が狭く充分に墓地がとれないので早くから火葬が一般化した。

棺を組の男性がかついで寺まで行き、葬儀をすませて火葬場に行った。翌日、近親者は骨拾いといって竹箸と木箸を用いて、アイバサミで拾い骨壺に納め、再び寺で経をあげてもらい墓に納めた。

三重では墓を土盛りにして位牌をのせ、三日参りにトウバを立てて三日垣をつくった。

8 忌 中

死後四十九日間は「ヒがかぶつとう」という。ヒとは忌みのことで、この期間は遺族は忌みの生活に服し、神前（鳥居をくぐらぬ）や晴れがましい場所に出ず、神棚や写真に白紙を貼って汚れが及ぶを防ぐ。

三日詣りの翌日から初七日まで、親戚や組の人々は御中陰といって毎晩お詣りする。野菜のゴマアエや豆・丸ボーロ・オケソクさんなどを出す。二七日・三七日以下、七日ごとにオヨイをし七七、四十九日は忌明けで盛大に供養をする。また、初立日・二立日・百カ日にも追善供養をする。

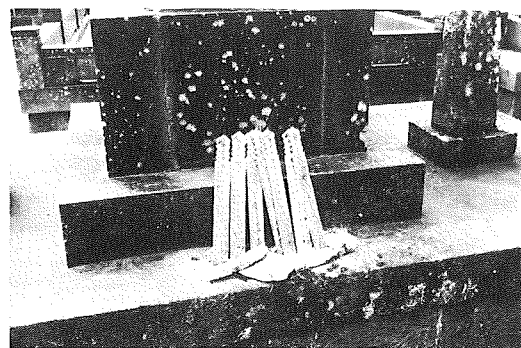
三 年 中 行 事

毎年、同じ日に繰り返し営まれる行事は、長い歳月にわたって定着してきたものであるが、春夏秋冬と四季の移り変わりがはつきりしている風土を背景とした生産労働のうえに生みだされたものである。

農耕生活を例にとれば豊作を予祝し、災厄を祓い、収穫を感謝するといった一連の行事が行われる。これらの行事は農耕生活から導きだされたもので平常（ケ）の生活のなかに晴れ（ハレ）の日を折りこんで生活の区切りとした。晴れの日には平常の労働から解放された休み日で、静かに忌みつつしみ神の来臨を願って、神と人とが相ともにいただく（共同飲食）日である。神祭りをすべき晴れの日には、休まずに田畑にてて仕事をする者は「ふゆう坊の節句働き」といって非難された。

ここに記録した行事の多くは、既に廃絶したものや生産労働の変化により形を変えたものが多く、また、調査が町内全域に及ばなかったことにより、特定の地域にかたよってしまったことをおことわりしておく。

明治五年の暦制改革で従来の太陰太陽暦（旧暦）が廃止され、太陽暦（新暦）が採用された。農村や漁村における年中行事は実作業に即して行われていたので、新暦にそのまま移行することができず、新暦、旧暦、あるいは新暦のひと月遅れとまちまちになった。とくに漁業は月のみちかけと深い関係があり年中行事もそれに即して行われていた。



トウバ（三重・円城寺）